

# 地域への愛着を深める教育活動の推進

## ～「充実感」と「つながり」を重視して～

五泉市立村松小学校 校長 神田 武司

### 1 はじめに

村松小学校は、明治5年、村松藩の藩校「自彊館」を譲り受けて創設した。今年で142年目を迎える伝統ある学校で、建学にかかわる言葉である「自彊不息」は、今でも私たちに自ら努力することの大切さを教えてくれる。「自彊不息」とは、中国の易経の中にある言葉で、「自分からすすんでつとめ、励んで怠らない」という意味である。

教育熱心な土地柄もあり、ボランティア等で学校に足を運んでくれる人も多い。

### 2 学校経営方針

村松小学校の学校教育目標は、「学び合う子 明るい子 チャレンジする子」である。友達と力を合わせて学び、友達を思いやり、つらいことにも負けずにがんばる子を目指している。このような子どもを育てるために、「充実感」を味わわせることと「つながり」を深めることを大切にして教育活動を進めている。

#### (1) 充実感を味わわせるために

- ・目的意識を明確にして、課題解決に取り組ませる。
- ・興味・関心を高め、主体的な取組を促す。
- ・体験的活動を取り入れる。
- ・「振り返り」の時間を確保し、成果を確認できるようにする。
- ・賞賛を与える。

#### (2) つながり（ひと・もの・こと）を深めるために

- ・考え合う、伝え合うなど、友達や地域の人とのかかわりを教育活動に取り入れる。
- ・物や人に対して思いやる、感謝することを表現する機会をつくる。

これらの視点を大切にして、地域と連携し、教育資源の活用を図ることで、子どもの学習は一層意欲的になると考えた。なぜなら、身近な人、身近な物やことと触れる体験的活動を通して、実感を伴って物事をとらえていくからである。そして、地域を学習の場とし、地域とかかわることで地域への愛着が深まり、自信を持って物事に挑戦していく子どもが育つであろうと考えた。

### 3 地域とかかわる教育活動の推進

#### (1) かがやきタイム（総合的な学習の時間）

積極的に地域の「ひと・もの・こと」に働き掛けることによって、地域の過去・現在・未来を考え、地域の未来を担う子どもに育てることを目標として、総合的な学習の時間を推進している。

#### 〔身近な環境の現状をとらえ、未来を考える〕

4年生は「稀少淡水魚イバラトミヨ（俗称トゲソ）」を中心に据え、イバラトミヨと生息環境を守る「五泉トゲソの会」のみなさんの支援を受けて学習活動を展開した。

「トゲソ」を通して、五泉の水環境の「今」を知ること。そして、今、自分たちができることを考え、五泉の「未来の水環境」のために行動できる子どもにしたいと考えた。

子どもたちは、「五泉トゲソの会」のみなさんから、昔の村松の水はどうだったかのかについてお話を聞いた。お話の中で、湧き水の出る水辺でしか生息できないトゲソのことや、村松にも昔トゲソがすむ水辺があったことを知った。お話を聞いた子どもたちは、「トゲソがすむ水辺ってどんなところなんだろう」と疑問を持った。そこで、疑問を解決するため、トゲソの生息地へ出かけること

にした。子どもたちは、生息地である水路の様子や水温、生えている水草について熱心に調べた。その結果、生息地の

水質自体はよいことは分かった。しかし、トゲソを見つけることができなかった。現在、トゲソの生息地でさえも、その数を減らしていること、以前にもまして生息数や生息場所が減少していることが分かった。



観察活動を通して、子どもたちは、トゲソを取り巻く五泉の水環境が悪化してきていることや、その原因が人間にあることを知り、水環境に対する関心を高めた。

#### <観察活動後の子どもの記録>

水がきたなくてトゲソがすむところが少なくなる原因が人間だっていうことがびっくりした。トゲソがすめるかんきょうをつくりたい。

この観察活動がきっかけとなって、子どもたちは「身近な滝谷川はきれいなのか」と新しい疑問を持った。

学校の脇を流れている滝谷川は、子どもたちにとっては身近で親しみのある川である。「五泉トゲソの会」のみな



さんのアドバイスをいただきながら、滝谷川で水質調査を行った。子どもたちは、生き物を捕まえ、水生動物指標カードを使って、水のきれいさを確認した。COD調査も行った。また、流速調べ、川底の様子、水のおい、水のごりなどさまざまな点から川の様子を調査した。

#### <調査活動後の子どもの記録>

水質調査をして、滝谷川はややきれいな川だと分かった。水生生物もたくさんいてすごかった。でも、ごみや空き缶が捨てられていて、そんなにきれいだとは感じられなかった。

そして、次のような思いや願いを持った。

- ・私は、川にごみを捨てたり、台所のはい水に油を捨てたりしない。トゲソが生きられる地球にしたい。
- ・今まで習ってきたことを生かして五泉の川が、きれいな川であるようにしていきたい。
- ・トゲソがすむかんきょうや水、自然をたいせつにしないと私たちにとっても、トゲソにとっても危ないと思った。水は私たちにとっても、トゲソにとっても大切なものだと思う。

子どもたちはこうしたふるさとの川、自然を目の当たりにし、「トゲソや水環境を守らなければならないんだ」という強い思いを持った。そして、保護者をはじめ、地域のみな

さんに学習発表会の場で思いを訴えることにした。



発表会当日、全員が、一人一人の「思い」を、そして、五泉がいつ

までも「清流の里」と呼ばれ続けられるよう、今、自分たちができることを呼びかけと合唱で伝えることができた。

「五泉トゲソの会」のみなさんとの出会いが、子どもに「五泉の水環境の未来」を考えさせることにつながった。また、体験的活動と関連して、「トゲソを知りたい」「身近な滝谷川の水環境は大丈夫なのか調べたい」と目的意識は変容していったが、「五泉の水環境は大丈夫なのか、はっきりさせたい」という大きな目的意識を子どもたちは持ち続けた。この目的意識が、相手に伝えるという「振り返り」につながっていった。そして、伝えることで、子どもは充実感を味わうことができた。

それと同時に、「五泉トゲソの会」のみなさんとの出会いについて書いた絵入りの手紙には、「五泉トゲソの会」のみなさんから学んだことに対する感謝の気持ちが随所に綴られていた。この活動で「五泉トゲソの会」のみなさんとのつながりを確かめることができた。

#### (2) ボランティアタイム（地域へ貢献する活動）

各学期1回のボランティアウィークを設けている。その週間で、学校や地域のためになる活動を子どもが考え、実践している。

##### ①身近な環境が見えてきた～清掃活動～

4年生は、「五泉トゲソの会」のみなさんと五泉の水環境の現状を学習したことで、身近な環境にも関心を強く持つようになった。子どもたちは、学校に隣接する城跡公園には、ごみがたくさん落ちていることに改めて気付いた。どうしたらよいか学級で話し合った。子どもたちの話し合いの結果、4年生みんなで清掃活動をするようになった。

当日、準備万端整え、4年生53名は、公園中つぶさに見て回り、落ちているごみを拾った。終了後、みんなが拾ったごみを持ち寄った子どもたちは、予想以上の多さに、改めて驚いた。地域へ貢献したという充実感とともに、公園など身近な環境さえ、きれいに保つことが難しいのだということ学ぶ機会ともなった。

4年生の清掃活動には、総合的な学習の時間の学びとつながり、「自分たちがいつも遊ぶ公園をきれいにしたい」という強い目的意識があった。そのため、ただやらされているだけの活動で終わることなく、充実感を味わうことができた。

##### ②まちの人とのふれ合いを～まちなかコンサート～

1学期、3年生が学校職員を招いて、音楽の学習の成

果を披露するミニコンサートを開催し、好評を博した。そこで、「みんなの音楽をまちのみなさんにも届けられたら、すばらしいね」という担任の思いを子どもたちに伝えた。この働き掛けによって、子どもたちは「自分たちの音楽をまちの人にも聴いてほしい」という願いを強く持った。そこで、3年生が中心となり、そこへ2年生、5年生が協力し、「まちなかコンサート」を計画することとなった。子どもたちは、音楽練習に励むとともに、ポスターをつくり、まちの人へ呼びかけた。会場となるさくらんど会館にもポスターを掲示していただいた。

コンサート当日、さくらんど会館多目的ホールには、子どもたちの保護者はもちろん、祖父母、まちのみなさんが駆けつけてくれた。

トップバッターの2年生の歌声が会場に響き渡った。歌い終わると、会場から大きな拍手が起こった。続いて、3年生。進行役の子が曲目紹介をす



る。「ミッキーマウスマーチ」のリズミカルな曲が、観客の手拍子を招いた。合奏後、やはり、大きな拍手が送られた。そして、5年生。音楽交歓会で発表する合唱「つばさをだいて」のしっとりとした曲調が会場を包み込んだ。誰しもがその歌声に聴き入った。歌い終わった後の少し間を置いた大きな拍手の中、どの子の顔も満足そうだった。

#### <コンサート後の子どもの感想>

- ・お父さんとお母さん、おばあちゃんが見に来てくれた。きんちょうしたけど、うれしかった。
- ・たのしいまちなかコンサートだった。5年生の「つばさをだいて」もじょうずだった。
- ・さいごに合唱した「COSMOS」は、みんなでやると楽しい。
- ・お母さんは来られなかったけど、みんなが見に来てくれてうれしかった。

終了後、子どもの祖父母のお一人が、「本当によかった。想像以上だった」と職員に話しかけてくださった。最高のほめ言葉だった。

子どもたちは、自分自身がうまくできたことやコン

サートの楽しさを他の学年の子どもたちと共有したことで、達成感や充実感を味わうことができた。さらに、来場した家族、地域のみなさんとのつながりを実感するひとときともなった。

#### (3) ふるさとふれあい遠足（地域のよさ再発見活動）

自分の住むまちなのに、まちのことを知らない。当たり前すぎて、まちの「ひと・もの・こと」に心が揺り動かされない。そうした子どもたちにふるさとのよさを再発見させる活動として、学年別遠足を実施した。

計画を立案する際には、PTA役員のみなさん、学校評議員のみなさんから意見をいただいた。地域の方の知恵をお借りし、子どもたちと感動体験を共有できる行き先探しを行った。また、事前に地域の歴史・自然に詳しい学校評議員の方を講師としてお招きし、全職員でふるさと巡検も行った。

さわやかな好天に恵まれた9月20日。各学年がそれぞれに計画したルートで目的地を目指した。

#### 【新しい仲間とのつながりを強くする】

これまで、平成27年度の統合に向け、十全小学校との交流を重ねてきた。

交流活動を通し、5年生の子どもたちに、「十全小ってどんな学校だろう?」「十全小に行ってみよう」という気持ちが

高まっていた。そこで、5年生は、「十全小の秘密をさぐろう」をテーマに、



十全小学校を訪問し、調査活動を行った。

まず、子どもたちの目に入ったのは、校門を抜けると出迎える様々な樹木であった。シュロ、ハクモクレン、サルスベリなど。

そして、グラウンドへ行くと、十全小の宝「モミの木」に出会った。どの子も目を見張った。幾年もの時を超えて、十全小の子どもたちを、そして校舎を、地域を見守ってきた大木である。その大木



に心揺り動かされた子どもたちは、それぞれの思いを

次のように書いている。

＜5年生の感想＞

- ・十全小のシンボルは、モミの木です。グラウンドのところに、大きく、堂々と立っていた
- ・大きなモミの木の葉は、大きく、木の下はすごくすずしく、だれもがここですごせるよう小さな椅子が一つあった。くきも太くまっすぐな木だった。

活動を終えて作成した「十全新聞」の中に、十全小へ訪れることができた喜びがたくさん書かれていた。その中に十全小の子どもたちの心に寄り添う「十全小も、来年は『ない』と思ったら、少しさみしいと思った」という感想があった。

5年生にとって、4月に新たに迎える14名の仲間たちと、ふるさとのよさを共有し、語り合えるよい体験となった。

交流活動の繰り返しが、仲間となる十全小をもっと知りたいという目的意識を持たせることになった。だからこそ、十全小のよさを積極的に探し、「モミの木」に出会い、その素晴らしさに気付くことができた。そして、その素晴らしさを実感したからこそ、母校を失うことになる十全小の子どもたちに寄り添う振り返りを行うことができたのである。

子どもたちは、十全小を訪れ、そこでの調査活動を「十全新聞」としてまとめることで、充実感を味わい、これまでつむいできた十全小とのつながりをさらに強め、確かなものにした。



#### 4 まとめ

2学期末、子どもたちの地域への愛着度を把握するため、以下のアンケートを実施した。

地域愛着に関するアンケート

地域愛着観点	No.	項目
選好	1	五泉(村松)にお気に入りの場所が見つかった(ある)。
	2	五泉(村松)が好きだ。
感情	3	五泉(村松)は大切だと思った
	4	五泉(村松)は自分のまちだという感じがした。
持続願望	5	五泉(村松)にずっと住み続けたいと思った。
	6	五泉(村松)にいつまでも変わってほしくない物があった(見つけた)。
	7	五泉(村松)に無くなってしまうと悲しい物があった(見つけた)。

かがやきタイム、ふるさとふれあい遠足、ボランティアタイムの活動ごとに「選好」「感情」「持続願望」

の3観点の項目に対して、当てはまるかどうかを問うた。

#### (1) 成果

かがやきタイムでは、90%以上の子どもが「感情(五泉は大切だと思った)」について「当てはまる」と回答した。ふるさとふれあい遠足では、およそ80%の子どもが「選好(五泉が好きだ)」について、ボランティアタイムでは、およそ70%の子どもが「感情(五泉は大切だと思った)」について「当てはまる」と回答した。

これらのことから、かがやきタイムのように、地域資源を教材化し、地域人材の支援を受け、繰り返し地域資源にかかわる学習の展開が有効であると考えられる。4年生は、「持続感情(無くなってしまうと悲しい物がある)」の回答が80%であり、他の学年よりも高い値であった。これは、自分たちに身近な事象を教材化することや人とのかかわりが愛着を深めることに効果的であることを示唆している。

ふるさとふれあい遠足では、目的地での体験的活動を工夫し、子どもたちに地域のよさを実感させたことが、「選好」の意識を高くした。ボランティアタイムでは、子どもたち自身に活動を考えさせ目的意識を十分に醸成したことが、地域の大切さを感じさせることにつながり、地域感情を強く抱かせた。

#### (2) 課題

活動の内容により、地域への愛着の深まりは異なる。どのような活動内容で、どのような地域への愛着を深めることができるのかを明確にし、計画的かつ重点的に展開する必要がある。また、目的意識の醸成いかんによって、学習後の充実感が異なる。目的意識を持たせる段階での教師の働き掛けの工夫を検討する必要がある。

#### 5 おわりに

「充実感」と「つながり」を重視し、地域資源を活用した教育活動の展開によって、子どもたちは地域への愛着を深めた。

今後も地域資源の「ひと・もの・こと」を積極的に教材化し、地域の過去、現在を追求できるカリキュラムを充実させたい。そして、子ども自身も地域の一人であることを自覚させ、一人一人の夢を育み、「地域」の未来を考えさせる授業の創造に努めたい。